16　バーカ、バーカ

マテウスがライトナー中将から託された密書を、メルグ人のホジャーニ派の誰かに渡すことが今回のレグルス2号の使命である。

出港してからすぐに、ゴサクは防御ユニットに関して何やらずっと作業をしているようだ。

以前、ジョージとキリルは、ゴサクの生死観を聞いてあっけにとられたことがあった。人間には魂があり、人が死ぬと魂は天へ昇る。そしてまた魂が人に宿ってこの世に生まれてくる。

「ということは、おれたちには前世ってのがあるってことかい？」

キリルがジョージに言う。

「前世ねえ……前世があるってことは、来世もあるよね」

「さしずめ、ジョージの前世はピザ職人ってところか」

キリルの言う通りかもしれないとジョージは思った。自分の前世はどんな奴で、どんなことで悩んでいたんだろうか。今世の自分は、レグルス2号の仲間と一緒に、とんでもない冒険をしてきた。これはこれで悪くない。そして来世ではどこで何をするのだろう。そもそも、自分の魂が来世に生まれ変わってくるのだろうか。

「でも、今が一番楽しいんだよなあ……」

ジョージはボソッとつぶやいた。

数カ月後。レグルス2号の四人はビウルジョカ恒星系の近くにいた。あの正体不明の地球の駆逐艦から攻撃を受けたのが、たった半年前だとは思えないほどに、いろいろなことがあった。

ビウルジョカ恒星系は、八か月前にレグルス2号とメルグの調査艦が到達した、それまでは誰も足を踏み入れたことのない領域であったが、ここに豊富な資源があることを確認した両者は、その権益を半々にする仮協定を結び、どちらの所有領域でもないことを確認した。つまり、ビウルジョカ恒星系は、公式には地球連邦、メルグ共和国、キョブ国のどの所有領域でもないことになる。

そして、ここから先はメルグ星人の領域となり、メルグ星への到着まであと三週間ほどかかる。

やっとここまできたか、とジョージが思っているところへ、ゴサクがやってきて

「なんか嫌な予感がします」

と言う。

ゴサクが「嫌な予感がする」と言ったら、必ず何か起こるので、ジョージは人工知能任せにしていたレーダー探索をマニュアルに切り替えたところ、数十隻の艦隊がビウルジョカ星系をうろうろしているのを見つけた。

「地球の艦隊ではないし、メルグの艦隊でもなさそうだ」

「つまり、キョブ星人ということか。だとしたら、見つかったら厄介(やっかい)だな」

マテウスがため息をつく。

キョブ星人はめっぽう好戦的である。こちらが非武装の船だからとて、何をしてくるか分かったものではない。

「何をしてるのか分からないけど、ここは逃げるが勝ちだな」

キリルが言っているところへ通信が入る。

『こちらはキョブ王国軍所属第四十九艦隊。貴艦は我が所有領域に不法侵入している。即時に退去するか、さもなくば攻撃する』

「なんだ、なんだ？　いつからここがヤツらの所有領域になったんだ？」

「とんでもない言いぐさですね。私には分かってあげることができません。」

ゴサクが首をかしげる。

「おれも、ちょっと何言ってるのか分かりません状態だよ。資源があると知れたとたん、いきなり領有権を主張するなんてね」

「ジョージ、適当に返事をしといてくれ」

とマテウスが指示すると、

「もうしました。『ばーか、ばーか、ばーか。』ってね」

ジョージが嬉(うれ)しそうに言うので、マテウスは頭を抱えた。

「やるな、ジョージ！」

とさらに嬉しそうなキリルだが、事態(じたい)は深刻化(しんこくか)する。

キョブ星人の艦隊が、レグルス2号の方へすごい勢いで向かってくる。も

ちろんレグルス2号も全速力で逃げているのだが、向こうの艦隊のスピードが上回っている。

「敵の推定射程距離入りまーす」

ジョージが他人事のように言うが早いか、おびただしい数のエネルギー砲がレグルス2号の船体をかすめる。たった一隻の小さな調査船に、三十以上の戦艦が一斉に射撃してくるのである。レグルス2号が第一波をかわせたのは奇跡に近かった。

第二波が来れば死ぬな。誰もがそう思ったが、第二波はいつまで経ってもやってこない。

どうもキョブの艦隊の動くようすを見ていると、レグルス2号を見失っているように思える。

「ゴサク、何かやった？」

「カクレミニンポーを防御ユニットに連動させました。今レグルス2号は透明人間のようになっている状態です。敵からは認識できません」

「やったな」

「でかしたぞ、ゴサク」

よし、逃げよう。

レグルス2号は、メルグ星の領域目指して一直線に逃げた。メルグの領域に入ってくれば、キョブ星人は追いかけてはこないだろう。

17　なんで分かるの？

メルグの領域に入ってしばらくして、レグルス2号は警戒を解いた。

「それにしても性格の悪い連中だね。」

「いや、ジョージが煽（あお）るのが悪い。」

「キョブ星人ってのは、これまでもああやって領域の所有権を主張して、無理やり広げてきたのかな？　宇宙は広いのに、なんであんなセコい真似するかね？」

口々に言うのを、ゴサクがまとめた。

「〔　Ａ　〕、彼らがシンコウする宗教の影響もあるのではないでしょうか。ちょっと聞いたことがあるのですが……」

キョブ星人は、ほぼすべての人が同じ宗教を信仰している。その教義では、生まれた者は彼らが信仰するたった一つの神に仕えるために生をうけたので、受けた命はその神のために使わなくてはならないそうだ。

「変わった宗教だな。それじゃまるで、神様の奴隷（どれい）じゃないか」

「ですよね。自分だったら、信仰したいとは思いません」

そんなことを話しているうちに、レグルス2号に通信が入る。

『こちらはメルグ共和国軍偵察（ていさつ）艦、艦長のギニ・ウ・ジョリです。そちら、地球連邦のレグルス2号とお見受けします』

「おっと、おれたち有名人になっちゃった？」

（上にぎりかよ……）とゴサクが思っていると、

「ゴサク、何か言った？」

とジョージが聞くと

「彼はホジャーニ派です」

とゴサクが断言するので、

「なんで分かるの？」

「分かるわけない」

マテウスとキリルが口々に言う。

それでもゴサクは

「なんとなくですが、ぼくには分かります」

『こちらレグルス2号です。お見知りおき感謝しま～す。ホジャーニ派の方たちですよね』

ジョージがこのように返信すると、向こうから『ぜひ直接お会いしたい』とさらに返信が来た。

マテウスは、罠（わな）の可能性を心配したが、ゴサクが「嫌な予感はしない。」と言うし、ジョージも「大丈夫、ゴサクを信じろ」と言うので、向こうの艦にお邪魔することになった。もちろん、ジョージのピザを持ってだ。

その数日後にはメルグ星の本星に到着し、レグルスの四人はメルグ共和国

軍本部ビルの中にある大きな会議室にいた。体育館かと思うぐらい広い部屋の中、壁を背にして立っていると、二人の兵士が奥のドアから入ってきて、その後にいかにも位の高そうなイゲンのある老人が入ってきた。

パリッとした軍服には勲章がいくつもかかっており、顔に白いひげをたくわえてはいるが、歩く姿は颯爽として背筋が伸び一切の老いを感じさせない。

その高位の軍人が長机の正面に立ち、レグルスの四人に笑顔を向けた。

「レグルス2号の皆様。ようこそお越しくださいました。むさ苦しいところですが、どうかおかけください。ほっほっ」

通常、軍人であれば自らの所属と名前をまず述べ、敬礼をキメるところであるが、この老人は違ったのでマテウスは少し驚いた。しかし、その柔和な口調に逆らうのも不自然である。マテウスは言われるがままに、目の前にある椅子に腰かけると、後の三人もそれに続いた。

「私はウジュナウ・ト・クジョーと申します。ほっほっほっ。一応ですが、軍の大将なんかをやらせてもらっておりましてな……」

この老人の一言には、さしものレグルスの四人もたじろいだ。軍の大将ともなれば、この国、いやこの星の政府大統領にも引けを取らない権力を持っているだろう。その人物が兵士二人のみの同伴で自分たちに会っている。本来ならば、多くの将官が居並ぶ中で会議するところである。地球軍の大将どころか、第九宇宙ステーションの長官や知事にさえ、直接会ったこともない

レグルスの四人が、遠いメルグ星に来て、軍のトップと向き合っている。不思議な巡り合わせである。

ところで、この老人の名前を聞いたゴサクは、ほぼ確信していた。

（「特上うな重」だ……）

ウジュナウ大将は、柔らかい表情は崩さないまま、切り出した。

「ライトナー中将からの書簡を読ませていただきましたよ。貴官らはとんだ災難に巻き込まれたと思われるかもしれませんがな。ややもすれば歴史に名を残しかねない偉業、その最大の功労者となる可能性が大ですな。ほっほっ」

「つまり、メルグ共和国との同盟が正式に結ばれる日は近いとおっしゃいますか」

とマテウスが老人の言葉を受けた。

「お察しの通りじゃ。今頃地球連邦では、キョブ星人からワイロをもらっていた軍人や政治家がライトナーさんたちの手によって粛清されていることだろうよ。ほっほっ」

あごの豊かな白いひげを右手でしごきながら、ウジュナウ大将が言葉を続ける。

「とは言え、貴官らが今すぐ地球連邦にもどるのは危ない。もし貴官らがよければじゃが、しばらくここメルグ星で骨休めをしてはどうかな。ほっほっ」

ウジュナウ大将は、いったん間を置き、何か思い出すように天井を見ながら。

「そういえば、ピザ……じゃったかな。クウニ・ド・ラインがしきりに言っておったわい。天にものぼるようなうまさじゃったと。この老人にも、ひとつ馳走をしてはもらえんか。ほっほっ」

ウジュナウ大将の言葉を聞いて、ジョージとゴサクが目を合わせてうなずいた。

「じつは、閣下。私どもの方からも、食べていただきたいものがあります」

とジョージが言うので、ウジュナウ大将は興味深げにその内容を聞いた。

ウジュナウ大将との接見を終え、大広間から退室した廊下を歩きながら、マテウスがジョージに言う。

「お前たち、今度は何をやろうとしている？」

「別にたいしたことじゃない。せっかくだからうまい飯を食べてもらおうってんだ。なあ、ゴサク」

「そうですね。私の家に代々伝わる秘伝の調味料『ミソ』を皆さんに味わってもらう日がやってきました」

ゴサクは目を輝かせて握りこぶしを作っている。何やらやる気満々だ。

ジョージがマテウスに聞く。

「なあ、マテウス。メルグ星っていやあ、おれたち地球人じゃとてもかなわない科学技術を持っているが、チメイテキな欠点があると思わないか」

「チメイテキな、欠点？」

「メシだよ、メシ。メルグ星人の作るメシって、まずいってほどじゃないんだけど、どれもこれもなんか微妙だと思わないか」

「た、たしかに……」

このことであった。食事には特にこだわりを見せないマテウスでさえも、メルグ星での食事はおいしくないと思っていた。

ジョージが続ける。

「あんな、いかにもおいしそうな名前を名乗りながら、ふだんは猫もまたぐようなメシを食ってるんじゃなあ……」

「名前？」

マテウスはまだ分かっていないようだった。

しかし、キリルは納得したようにポンと手をたたいた。

「分かったぜ、ジョージ。名前だ」

何もかも理解した様子のキリルを見て、ゴサクが笑顔でうなずいた。

この場で、まだ分かっていないのは、マテウスだけのようである。

キリルが、ジョージの代わりに説明を始めた。

「つまりこういうことさ、メルグはホジャーニ派とタリアーイ派で二分されているが、ジョージとゴサクは名前を聞いた瞬間にどっち派か分かってしまう。なぜ分かるのか。それは、料理の名前だ。メルグ星の人々はなぜか名前

が料理のもじりになっている。しかも、彼らの名前は、元々は地球にあった料理の名前だ。もしかしたら、メルグ星人の祖先は、もともと地球にいたのかもしれない。そうじゃないかもしれない。おれには分からない。だが、これだけははっきりしている。メルグ星の人たちは、その料理の本当のうまさを知らない。そんなところかな、ジョージ、ゴサク」

「それで、タリアーイ派とホジャーニ派の合同食事会を提案したというのか。しかし、目的はなんだ？」

何かをするときには、そこに必ず理由や目的や意図があると考える、それがマテウスという人間だ。

そこのところ、逆にジョージは適当だ。

「目的？　そうだな。『どうだ、オレ達のメシはうまいだろう』ってドヤ顔することかな。はっはっは」

18　ズッパ・ディ・ペーシェでございます

今から一か月ほど前。まだメルグ星域に到達していない頃のことであった。

ピザも作りあきて艦内でひまを持て余していたジョージは、めずらしくキッチンで料理をしているゴサクを見かけた。ゴサクが真剣な眼差（まなざ）しでのぞき込んでいる鍋を見ると、それはうす茶色のスープだった。

「変わった色だけど、いい香りだね」

「あ、ジョージさん。一緒に食べます？　ミソスープですよ」

「ミソスープ？」

「そうです。カツオっていう魚と、コンブっていう海藻（かいそう）からだしをとって、ミソで仕上げるんですよ。味見どうぞ」

ゴサクは小皿にミソスープを少量注いでジョージに手渡す。

「へぇえ。つまり和風のスープってことだな」

小皿のミソスープを口にしたジョージは、突然ゴサクに食ってかかるように顔を近づける。

「おい、どうなってんだこりゃ！　ゴサク！　どういうことだ！　こんなうまいスープ、どうして今までかくしてた！　もっと飲ませろ、この野郎！」

ゴサクはジョージの反応に驚くと、改めてスープ皿にミソスープを注いで調理台に置いた。

「かくしてたわけじゃありません。前回の航海では、材料を持ってきていなかったんです。それに、カツオやコンブは手に入りにくいんですよ」

「そうか。それにしてもこのスープはうますぎるぞ。うますぎ注意だ。後でマテウスとキリルの二人にも飲んでもらおう……ああ……そうだ。そういやあれだ、イタリア料理にも似た料理があるなあ。知ってるかゴサク。ズッパ・ディ・ペーシェっていうんだ、魚介ベースのトマトスープさ」

ジョージの言葉を受けて、今度はゴサクがうむむと考えこむ。

「和食……イタリア……似た料理……。ねえジョージさん、前から気になっていたんですけど、メルグ星の人たちって……」

「ああ、変だよな」

というジョージに、ゴサクは指を突き立てて問いかけた。

「ウニイクラ丼！」

「ひげの艦長！　からの、アマトリチャーナ！」

「クソ艦長です！」

「やっぱりそうか！」

ジョージとゴサクは、だんだんテンションが上がって声が大きくなる。

「ペスカトーレ！」

「義理と人情の監視役！」

「松茸（まつたけ）の土瓶蒸（どびんむ）し！」

「ドンちゃん！」

「うおおおおお！」

両手をつき上げて叫ぶ二人。そして、顔を見合わせて「やっぱりそうか」という表情になった。

少し落ち着いたジョージが、ミソスープを口に運びながら言う。

「それにしちゃあ、メルグ星人の皆様はちょっと不甲斐ないと思わないか？」

「ですねえ……あの人たちの料理はねえ……あれじゃ名前負けもいいところです」

「だよな。メルグ星人どころか、あれじゃメシマズ星人だ。なあ、ゴサク。もし無事にメルグに着いたら、いっちょやってやろうと思うんだ」

「ピザですか？」

「いやいや、このミソスープも味わってもらおうぜ、何しろ『和食派』の人たちも大勢いらっしゃるからな」

「メルグ星人って、元は地球人だったんですかね？」

「さあな。いろいろ引っかかるところはあるが、おれには分からねえ」

などというやりとりがあって、今回の食事会につながるのであった。

ということで、ホジャーニ派とタリアーイ派の両陣営の高官が招かれ食事会が開かれた。

「地球人がおいしい料理を振るまってくれる」という触れ込みに加え、ジョージのピザは、メルグの軍人のあいだで噂になっていたこともあり、多く

の出席者がただならぬ期待を胸にこの食事会に参加していた。

「　Ｂ　」、出席者の前に出されたのは、スープ皿が二つのみであった。

大広間に居並ぶ、メルグ共和国の高官たちは、きつねにつままれたような顔を見合わせ、ざわついている。

やがて、大広間のステージに、ジョージとゴサクがならび、まずジョージが口火を切った。

「皆様お待たせいたしました。お手元にあるのは、ズッパ・ディ・ペーシェでございます」

「なんだよ。地球人のうまい料理が食べられると思ったら、こんなわけの分からないスープ二皿か」

「スープぐらい家でも食べられるぞ」

とひそひそ言うのがジョージの耳にも入ってくる。

ホジャーニ派の陣営には、クウニ・ド・ライン艦長もいて、

「ピザは……ないのか……」

と残念そうにつぶやいていた。

ジョージが地獄耳（じごくみみ）を発揮して

「ピザは後で出してやらあ。それより、このスープはおれとゴサクで一晩かけて準備したんだ。つべこべ言わずに黙（だま）って話を聞きやがれ！」

悪態をつくジョージを見て、マテウスは頭を抱え、キリルは愉快（ゆかい）そうにゲラゲラ笑っている。

「おい、今のは問題発言ではないのか」
「同盟撤回（てっかい）だ」
とまた会場ではひそひそ言っている。
ジョージは取り合わずに話を続けた。
「ああ、失礼。では料理の紹介をいたします。皆様のお手元、右側のスープは、ズッパ・ディ・ペーシェのホジャーニ風。左側のスープが、ズッパ・ディ・ペーシェのタリアーイ風でございます。ズッパ・ディ・ペーシェというのは、魚介のスープという意味です。同じ魚介のスープですが、ホジャーニ風とタリアーイ風を用意させていただきました。どっちも目ん玉飛び出るくらいうまいぜ、つべこべ言わずに食ってみな！」
ジョージの言葉に会場がざわめく。
「ホジャーニ風？」
「タリアーイ風？　どういうことだ」
「彼らは地球人のはずでは」
「とにかくいただこうじゃないか」
出席者が次々とスープをすするにつれて、会場のざわめきはカンタンのどよめきへ変わっていく。
「うまい！」
「なんだこのスープは？」
「おかわりはないのか？」

「わしも、もう一杯ほしい。両方だ」

会場の反応を見て、ジョージとゴサクは顔を見合わせて笑顔になった。

「たくさん作っておいてよかったですね」

「ああ、予定通りだ」

大量に作ったスープが空になるころ、キッチンへ戻ったジョージが、焼きたてのピザを手に会場へもどってきた。

「さあ、どんどん焼くから、じゃんじゃん食ってくれ」

ゴサクもジョージを手伝ってピザを運んでいた。

これまでジョージのピザを食べたことのある一部の人を除いて、メルグ星の人たちにとっては、生まれて初めて食べる料理であった。

「おお、これが噂（うわさ）のピザという料理か」

「ホジャーニ派の連中め、私たちに内緒でこんなにおいしいものを食べていたのか」

「これは、うますぎるぞ！」

このように、食事会は大成功に終わったが、終わってからが大変であった。

ジョージとゴサクは、メルグ星の高官たちに囲まれて質問攻めにあっていた。

ある者は「うちの専属（せんぞく）料理人にならないか」と言う。

ある者は「お金を出すからレストランをやらないか」と言う。

あらゆる申し出をすべて断るかわりに、ジョージとゴサクは知る限りの料

理のレシピを提供するということで話がついた。

これは後日談であるが、その後メルグ星では『ジョージ・ピザ』というピザ屋が開店し、大人気となったそうだ。料理長は、あのカート・レペスである。

そして、『ジョージ・ピザ』は、メルグ共和国軍人の御用達（ごようたし）の店となり、それまで反目し合っていたタリアーイ派とホジャーニ派の区別なくにぎわうことになる。やはりジョージのピザは宇宙に平和をもたらすのであった。

19　こうだぞ、ゴサク

さて、メルグ星でのんびり過ごしていたレグルス二号の四人に、地球連邦のライトナー中将から高速通信が入った。「　C　」、マテウスが対応した。

「貴君らのおかげで地球連邦とメルグ共和国の同盟条約が無事締結されることになった。こちらでは、レグルス2号の四人はすっかり英雄扱いだ。今となっては第九ステーションで、貴君らの名を知らぬ者はいないほどだよ。我々も、貴君らがもどってきた日には、記念式典と祝賀会をやろうと毎日盛り上がっているよ」

「とんでもないことです。中将の御助力がなければ今頃小官はヴァルハラへ旅立っていたことでしょう。それに、記念式典など……小官には……」

「まあ、そう謙遜なさるな。私は私のやるべきことをやったまでだ。ところで、マテウス大尉。いきなり本題だが、わが軍では貴官の軍人としての任を解き、来たる第九宇宙ステーションの知事選挙の候補者として推挙しようとする機運が高まっている。メルグ共和国との人脈のこともある、またとない人選であると私も考えているが、どうかね」

「ち・じ・せ・ん・きょ……ですか？」

「もちろん、私も全力で応援させてもらう。今のところ貴官が出馬すれば、当選は間違いない情勢だ。悪くない話だと思うがね」

ライトナー中将の申し出は、全くの想定外だった。さすがのマテウスも一

瞬動揺したが、やや間を置いてスクリーンに映るライトナー中将に向き合った。

「謹んでジタイさせていただきます」

「そうか……残念だ。しかし、君ならそう言うかもしれないと思っていたよ。やはりシビリアンコントロールのことが気にかかるのか。あれは時代遅れの化石のような考えであると私は思っているのだがね」

「いえ、小官は……シビリアンコントロールとか、そういうことではないのです」

「ほう。では、なぜこんな『いい話』を断るのかな？」

ライトナー中将の質問に、マテウスは少しだけどもりながら返答をした。

その返答を聞いたライトナー中将は

「はっはっはっ、君らしくもない。いや、かえって君らしいか。はっはっはっ」

と痛快そうに笑った。

その日の午後、マテウス、キリル、ジョージ、ゴサクの四人は、以前に捕虜として過ごした宿舎のリビングにいた。今度は客人としてである。以前は監視役だったカート・レペスが、今回は御用聞きとして四人の側にいる。そのカートは、ジョージにピザ作りを習っているところだ。

カートは熱心にジョージの説明に耳をカタムケ、首がもげるかと思うほど

うなずきながら、メモをとっていた。

そして、例によって酒瓶を手にしたキリルが、ミルクティーをすするマテウスに、話しかけていた。

「地球じゃあ、おれたちすっかり英雄扱いらしいな」

「ああ、帰ったらいろいろ連れ回されて忙しくなるだろう」

「ステーションの知事選挙に立候補するそうじゃないか、マテウス。これからは、呼び捨てじゃなくて『マテウス様』とお呼びしなきゃな」

「なぜ、その話を知っている」

「ステーションニュースで連日報道されてるぜ。遠く離れてはいるが一応チェックしてるんでな」

「そうか、だがその話なら断った」

事も無げに言うマテウスに、今度はゴサクが反応した。

「マテウスさん。断ったって、知事ですよ？　知事。大尉からステーション知事になるなんて、とんでもない出世ですよ。断るなんて信じられないです」

「そうかな……」

マテウスはあくまでも静かにミルクティーをすする。

するとジョージが、いたずらっぽい笑みを浮かべて、マテウスの横に来て、直立して敬礼しながら、例の一発芸『マテウスの物まね』を始めた。

「こうだぞ、ゴサク」

言いながらジョージは、わざとらしく直立敬礼のまますっとんきょうな声

で続ける。

「『ライトナー中将！　しょっ小官は、レグルスが好きなのであります！』ってな」

「いやいや、マテウスに限ってそんな恥ずかしいこと言わないよ」

「マテウスさん。本当にそんなこと言ったんですか？」

キリルとゴサクがかぶせたとき、すでにマテウスは口にふくんだミルクティーを盛大に吹いていた。

どうやら図星であったようだ。

（おしまい）